

武道必修化に伴う中学生の剣道イメージに関する研究

古澤 伸晃*・新里知佳野*・八木 沢 誠*・
軽部 幸浩**・藤田 主 一*

The Image of Kendo and the Compulsory Budo Course among Junior High-School Students

Nobuaki FURUSAWA*, Chikano SHINZATO*, Makoto YAGISAWA*,
Yukihiro KARUBE** and Shuichi FUJITA*

In our study, we examined the psychological structure of junior high-school students participating in compulsory martial arts, focusing on their image of Kendo. Subjects of the survey included 389 students (156 boys, 233 girls, and average age 13.7 ± 0.8 years) enrolled in public junior high-schools in Chiba prefecture. In the 10 sections of the survey form, beginning with the phrase “What is Kendo,” we asked the subjects to complete the sentences with what came to their mind. We further requested them to choose one sentence that had the strongest image of Kendo. Subsequently, text mining was performed on all the sentences we obtained, and the extracted words and phrases were factor-analyzed.

Consequently, it became clear that the image of Kendo differs depending on whether the subjects had experience in Kendo lessons. Factors such as “Budo, Kiai, and Yuko-datotsu” were recognized by those with Kendo experience, while factors such as “Culture, Reigi (etiquette), and Budo” were recognized by those without Kendo experience. The factor of “Budo” was common for both sets of students with regard to their image of Kendo.

key words: compulsory Budo course, image of Kendo, psychological structure of Kendo

問題の所在と研究目的

2012 (平成 24) 年 4 月より中学校保健体育で武道が必修化された。2008 (平成 20) 年 3 月に改訂された文部科学省「中学校学習指導要領 (生きる力)」の保健体育科目では、1 年生と 2 年生で、A 体づくり運動、B 器械運動、C 陸上競技、D 水泳、E 球技、F 武道、G ダンス、H 体育理論の 8 領域がすべて必修、

3 年生では AH が必修、BCDG から 1 領域以上を選択、EF から 1 領域以上を選択、すなわち球技と武道から 1 領域以上を選択履修することになった。この改訂により、1 年生と 2 年生は男女とも武道を履修するが、学校や地域の実態に応じて柔道、剣道、相撲に加え空手道、なぎなた、弓道、合気道、少林寺拳法、銃剣道などについても履修できることになった。この改訂は、2012 (平成 24) 年に完全実施されたので

* 日本体育大学スポーツ文化学部

Faculty of Sport Culture, Nippon Sport Science University, 7-1-1 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo 158-8508, Japan.

** 日本体育大学体育学部

Faculty of Sport Science, Nippon Sport Science University, 7-1-1 Fukasawa, Setagaya-ku, Tokyo 158-8508, Japan.

ある。武道が必修化された大きな理由は、中央教育審議会の答申を受け、2006（平成18）年改正の「教育基本法」第2条5に「伝統と文化を尊重」することが強調され、すべての生徒に基礎的・基本的な知識・技能を習得させることが中心的課題であり、このため中学校第1・第2学年では武道・ダンスを含むすべての運動領域が必修となったことによるものである（木村，2011）。

なお、2017（平成29）年7月改訂の同書「解説」は、武道の特長について「武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合い互いに高め合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。また、武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する対人的な技能を基にした運動である」と説明している。

中学校武道必修化後の実施率に関して、三藤（2015）による2013（平成25）年の調査では、柔道が50%以上の都道府県は33で、山形県（99.0%）、秋田県（96.7%）、京都府（96.0%）の順、剣道が50.0%以上の都道府県は13で、岐阜県（94.7%）、佐賀県（75.8%）、長野県（73.0%）の順であったが、柔道や剣道に加えて複数の武道を並行して実施している自治体は22に及んでいる。その一例として、千葉県教育庁体育科調査の情報によると、2019年千葉県中学校武道授業実施校（千葉県全中学370校）のうち、柔道238校、剣道162校、相撲7校、空手2校、なぎなた1校である（重複あり）。市原市から館山市に至る中学校（63校）では、柔道47校、剣道22校、相撲5校、なぎなた1校であり、木更津市・袖ヶ浦市・君津市・富津市の4市（27校）の内訳は、柔道15校、剣道17校、相撲5校、なぎなた1校である（軽米，2020）。

一方で、中学生を対象にした武道全体のイメージ研究は少ない（安道・濱田・川西・北村，2012，など）が、中学生以外を対象にした研究はこれまでかなりの数がある。たとえば、武道をどのように捉えているのかという観点から、武道全体へのイメージを調査した研究がある（船越，1979；加賀，1993；小林他，2018；由留木・金森・太田・石川，2018）。

（1979）は、10代から60代の男女225名に「武道は」という質問を50個用意し自由記述させたところ、武道イメージは「武道の一般的印象」「武道の概念規定」「武道の価値的側面」「武道場面に関連する側面」「武道の否定的側面」にまとまった。小林他（2018）は、武道授業（空手、弓道、剣道、柔道）を受講する学生395名に30項目の質問紙を用いて武道イメージを調査した。因子分析の結果、武道イメージは4因子（伝統文化、愉快快活、苦痛危険、静謐）で構成されることを見出している。また、「愉快快活」「静謐」の2因子は空手と弓道、剣道の授業終了後に得点が高くなることが示され、因子の特徴と武道競技との関係が明らかになった。

武道各種目のイメージを中心とした研究には、剣道（木原・今井，1985；小森・飯田・竹内・中島，1993；秋田・矢野，2018；秋田・矢野，2020，など）、柔道（飯田他，1984；小俣他，1993；中島他，2006；Moriwaki, Nakajima, Iida, Higo, & Fujita, 2008, 中島・橋本・火箱・岡田・長尾，2010，など）、弓道（鼻岡・栗田・柿山，2017，など）、空手道（泉・中島・野木・小森，2002，など）、合気道（熊澤，2014，など）、なぎなた（吉井，2020，など）がある。

木原・今井（1985）は、剣道受講生、剣道未経験学生、剣道部員に47項目の形容詞を示し自己評定尺度の方法で回答させた。その結果、「礼儀正しい」「精神的な」「伝統的な」「集中的な」「真剣な」などの項目は、大学生が共通にもつ剣道イメージであることが明らかになった。また、「攻撃的な」「積極的な」「肉体的な」「荒々しい」などの動的イメージや、「すばらしい」「楽しい」「感情的な」「衝動的な」などの内的感情イメージ、「協調的な」「依存的な」などの人的イメージは剣道部学生が高く、「質素な」「かっこうがよい」「形式的な」などの視覚的イメージは剣道部学生に低いという結果になった。木原他は、このような実証的なデータの蓄積によって、武道を安心して実践できる場を提供できると報告している。

小森他（1993）は、運動部員と非運動部員の合計200名の学生に対し、「剣道を行なっている人」へのイメージを調査した。35項目の因子分析の結果、運動部員が剣道人に対して持つイメージは「活動的な社会性」「落ち着いた社会性」「情緒の安定した社会性」「勇気がある社会性」「情緒性をもった活動性」、非運動部員では「意志性」「情緒の安定した社会性」「意

志の強い活動性」「自主的な活動性」「身体性を伴う活動性」で説明できることが明らかになった。しかし、木原・今井(1985)の研究は形容詞を用いた調査であり、直接的な表現によって剣道イメージを捉えたものとはいえない。また、小森他(1993)の研究は、「剣道を行なっている人」のイメージを調査したものであり「剣道」のイメージそのものを分析したのではない。木原・今井(1985)、小森他(1993)などの研究は、大学生を対象に用意された選択肢を例えば5件法等で回答させ、多変量解析を用いて分析・考察したものである。

一方、糸岡・日野・中岡・佐伯・池内(2011)は、中学2年生と3年生の男女各20名を対象に、「剣道具なし」と「剣道具あり」による実践的な単元授業前後の剣道イメージを測定している。単元授業前では、「カッコいい」「伝統的」といったイメージを持つ生徒もいたが、「痛い」「難しい」「くさい」「怖い」という否定的イメージの記述が多く見られた。しかし、単元授業後では、剣道に対して肯定的なイメージが強くなる傾向が見られた。特に、「礼儀正しい」「格好がいい」「伝統的」という肯定的イメージが多く見られ、授業を通してイメージが変容したことが示唆された。また、秋田・矢野(2020)は剣道授業に対するイメージを好転させるため、女子中学生185名に竹刀を持たせた授業後に、22項目の形容詞対を7件法で回答させた。その結果、剣道イメージは「見た目イメージ」「安心感イメージ」の2因子で説明でき、剣道授業によって「安心感イメージが高まる」と報告している。

このような研究は、実際に剣道を体験した者を対象にしているため、武道必修化にあっても剣道を未知の武道と位置づけている中学生に対するイメージ調査ではない。武道に関する従来のイメージの研究では、柔道に関する報告が中心であり(中島他, 2010, など)、この方法で剣道に対するイメージを測定したものは見当たらない。そこで、本研究は、中学生の剣道に対するイメージの心理構造について、武道必修化に伴うなかでも剣道経験がある者と経験がない者を対象に、自由記述の内容を多変量解析による分析方法を用いて検討し、両者を比較しながら「剣道イメージ」の構造を明らかにすることを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

調査は、千葉県内の公立中学校2校の生徒を対象として2020(令和2)年2月に実施された。分析対象となる有効回答者は、389名(平均年齢13.7歳, $SD=0.8$)であった。その内訳は、武道必修化に伴う剣道経験者の男子107名(平均年齢13.7歳, $SD=1.0$)、女子147名(平均年齢13.6歳, $SD=0.88$)、武道必修化に関わらず過去にも剣道未経験者の男子49名(平均年齢13.8歳, $SD=0.37$)、女子86名(平均年齢13.8歳, $SD=0.48$)であった。

2. 調査内容

質問用紙(A4判1枚)は、フェイスシート(学年、年齢、性別、剣道経験、スポーツ歴)に続き、剣道に対するイメージを調査するため、Kuhn and McPartland(1954)が開発した20答法(Twenty Statements Test; TST)に準じた手法を用いた。TSTは、もともと「私は誰だろうか」「Who am I?」という質問に対して、20種類の自分自身を記入した内容を整理することにより、人の自己意識や自己概念、態度などを知らうとする方法である(Kuhn, 1960; 星野, 1986)。具体的には、所定の用紙に20個の「私は」という言葉に続いて下線が書いてあり、その下線の上に20通りの自分自身について自由に書き加えるというものである。整理方法は、研究者によってさまざまな分類法が開発されている(星野, 2000)が、その多くは記述統計を用いている。

本研究では、TSTの「私は」の言葉を「剣道は」に置き換え、また20通りの自由記述を10通りとした。本来TSTは、1人に対して自己の内面を描くときに使用するが、今回の「剣道は」は、客観的な経験による知識を列挙するため、10種類の記述で十分であると判断した。さらに多数の対象者に調査しているので、剣道のイメージを広い範囲で徴取することができる。そこで、「剣道は」の言葉に続けて、剣道に対するイメージを10種類記入する方法を採用した。

3. 手続き

調査は、各中学校に依頼し、担当者により授業教室単位で行われた。調査への協力依頼は、次のように教示し同意を得ることで進められた。

次の1~10までの「剣道は」に続けて、10通りの「あなたの剣道に対するイメージ(剣道から感じるこ

と)」についての文章（例：剣道は ○○○○である。）を書いてください。また、10通りのイメージのなかで、あなたが最も強いイメージの番号に○印を付けてください。この回答には、正しい答え、間違った答えはありません。途中でやめなくなったら、やめなくても構いません。そのことで、不利益が生ずるようなこともありません。本調査によって危険または不快な状態になることはありませんが、心配なことがありましたら問合せ先に連絡してください。

なお、調査対象者が10通りの剣道へのイメージ（Ten Statements Test, 以下 TeST と略す）を記述し、その中から「最も強いイメージ」を選択する場合、自分が記入した他の記述と比較した上で選ぶことができる。1記述のみでは、それが「最も強いイメージ」なのか否かは不明であるため、本研究では10通りの記述を求めた。

4. 倫理的配慮

本研究の倫理的配慮であるが、調査の実施等については、日本体育大学倫理審査委員会へ、「人を対象とする研究倫理審査申請・研究計画書（研究課題名：剣道に対するイメージ調査）」ならびに「説明書」「同意書」を提出し、審査の結果、「審査結果通知書」により承認された（承認番号：第019-H125）。各中学校の授業教室で担当者が「調査の概要」を説明し、「同意説明文書」を読み上げる方法で依頼した。また、同意する者のみ調査用紙に記入すること、同意しない者については、白紙または一部未記入で構わない旨を伝えた。したがって、回収後、白紙・一部未記入の場合は同意しなかったものと見なして分析対象から外した。

5. 統計処理

(1) 因子分析

調査対象者の回答内容のうち、TeST全記述(3,227文)の回答（経験者が2,178文、未経験者が1,049文）と最も強いイメージ全記述（341文）の回答（経験者が240文、未経験者が101文）の中からKH Coder3（計量テキスト分析ソフト）を利用して、TeST全記述では10回以上の出現数、最も強いイメージは2回以上の出現数の単語を抽出した（樋口, 2020）。抽出された単語を基にSAS Studio 3.8 Enterprise Edition を利用した。主成分法を用いて、回転については、回転後の因子間相関行列を確認したところ、全因子間の相関値は、ほぼ0であったことによ

り、各因子は直交していると考え、回転方法をバリマックス回転に変更し因子分析を行なった。抽出された因子は、固有値1.0以上を採用し、さらに因子負荷量が0.4以上となる単語のみを抽出して、繰り替えて因子分析を行なった。

(2) 抽出された因子の比較

TeST全記述の回答と最も強いイメージ全記述の回答の因子分析の結果と経験者・未経験者および男子・女子それぞれに分類して、因子分析を行なった結果を比較した。全記述の因子分析の結果の因子が、それぞれの因子分析の結果の因子に含まれている項目の頻度の平均を求め、対応のないt検定を行なった。

結 果

1. 因子分析（TeST）

(1) 全回答の因子分析

Table 1は、TeSTにおける全回答の因子分析の結果である。因子分析の結果、5因子までを抽出した。

第I因子は、「胴」「小手」「面」が高い因子負荷量を示した。これは打突部位であるとイメージできるので、第I因子は「打突部位」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .87$ であった。第II因子は、「気」「剣」「重要」が高い因子負荷量を示した。これは、有効打突の気剣体が重要であるとイメージできるので、第II因子は「有効打突」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .77$ であった。第III因子は「相手」「気持ち」が高い因子負荷量を示した。これは相手の気持ちを思うとイメージできるので、第III因子は「気持ち」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .80$ であった。第IV因子は、「声」「出す」が高い因子負荷量を示した。これは、声を出すイメージできるので、第IV因子は「気合」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .80$ であった。第V因子は、「日本」「伝統」「文化」が高い因子負荷量を示した。これは、日本の伝統文化である道とイメージできるので、第V因子は「武道」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .64$ であった。

(2) 経験者の因子分析

Table 2は、TeSTにおける経験者の因子分析の結果である。因子分析の結果、5因子までを抽出した。

Table 1 因子分析の結果 (全回答)

因子名	因子					共通性	
	I	II	III	IV	V		
打突部位	胴	0.91	-0.06	-0.09	0.14	-0.04	0.87
	小手	0.90	-0.06	-0.09	0.13	-0.04	0.85
	面	0.80	-0.05	-0.09	0.12	-0.04	0.67
有効打突	気	-0.01	0.84	-0.14	0.24	-0.08	0.80
	剣	-0.01	0.83	-0.14	0.23	-0.07	0.77
	重要	-0.01	0.64	-0.08	0.22	-0.09	0.48
気持ち	相手	0.00	-0.02	0.74	0.29	-0.09	0.63
	気持ち	0.00	0.00	0.44	0.20	-0.06	0.23
気合	声	-0.20	-0.33	-0.39	0.64	-0.29	0.83
	出す	-0.17	-0.27	-0.38	0.54	-0.23	0.60
武道	日本	-0.02	-0.02	-0.09	0.15	0.80	0.67
	伝統	-0.02	-0.01	-0.07	0.11	0.63	0.41
	文化	-0.01	-0.02	-0.07	0.12	0.62	0.41
因子寄与	2.41	2.08	1.96	1.95	1.92	10.32	
因子寄与率 (%)	18.5	16.0	15.1	15.0	14.8	79.4	
累積因子寄与率 (%)	18.5	34.5	49.6	64.6	79.4		

Table 2 因子分析の結果 (経験者)

因子名	因子					共通性	
	I	II	III	IV	V		
有効打突	気	0.91	0.19	-0.04	-0.06	0.11	0.89
	剣	0.89	0.18	-0.04	-0.06	0.10	0.84
	重要	0.76	0.16	-0.03	-0.05	0.10	0.62
気合	声	-0.24	0.78	-0.30	-0.23	0.17	0.83
	出す	-0.20	0.65	-0.23	-0.18	0.13	0.57
	大きい	-0.16	0.52	-0.20	-0.15	0.14	0.38
武道	日本	-0.05	0.16	0.82	-0.09	0.21	0.75
	文化	-0.05	0.14	0.70	-0.08	0.18	0.55
	伝統	-0.04	0.11	0.62	-0.07	0.16	0.42
打突部位	面	-0.01	0.18	-0.01	0.88	0.17	0.83
	小手	-0.01	0.18	-0.01	0.87	0.17	0.82
姿勢	良い	-0.07	-0.26	-0.22	-0.13	0.67	0.58
	姿勢	-0.06	-0.31	-0.21	-0.12	0.66	0.60
因子寄与	2.35	1.87	1.83	1.79	1.66	9.50	
因子寄与率 (%)	18.1	14.4	14.1	13.8	12.7	73.1	
累積因子寄与率 (%)	18.1	32.5	46.5	60.3	73.1		

第 I 因子は、「気」「剣」「重要」が高い因子負荷量を示した。これは、有効打突の気剣体が重要であるイメージできるので、第 I 因子は「有効打突」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .86$ であった。第 II 因子は、「声」「出す」「大きい」が高い

因子負荷量を示した。これは、大きい声を出すイメージできるので、第 II 因子は「気合」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .68$ であった。第 III 因子は、「日本」「伝統」「文化」が高い因子負荷量を示した。これは、日本の伝統文化である

Table 3 因子分析の結果（未経験者）

因子名		因子					共通性
		I	II	III	IV	V	
武道	日本	0.79	0.02	-0.06	0.08	-0.08	0.65
	伝統	0.67	0.02	-0.05	0.06	-0.06	0.46
	文化	0.60	0.01	-0.05	0.10	-0.07	0.38
気合	声	-0.12	0.91	-0.12	0.20	-0.09	0.90
	出す	-0.12	0.91	-0.12	0.20	-0.09	0.90
精神	精神	-0.03	0.04	0.84	0.01	-0.09	0.71
	統一	-0.02	0.05	0.67	-0.01	-0.08	0.46
	鍛える	-0.02	0.01	0.54	0.04	-0.04	0.29
気持ち	相手	-0.12	-0.22	-0.04	0.71	0.04	0.24
	思いやる	-0.09	-0.18	-0.03	0.55	0.07	0.13
	気持ち	-0.10	-0.15	-0.01	0.50	-0.02	0.15
剣道具	重い	-0.04	-0.02	-0.05	-0.01	0.54	0.17
	服	-0.04	-0.02	-0.05	-0.01	0.52	0.16
	着る	-0.04	-0.02	-0.05	-0.03	0.52	0.17
因子寄与		2.35	1.87	1.83	1.79	1.66	9.50
因子寄与率 (%)		16.8	13.3	13.1	12.8	11.8	67.8
累積因子寄与率 (%)		16.8	30.2	43.2	56.0	67.8	

道とイメージできるので、第 III 因子は「武道」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .64$ であった。第 IV 因子は、「面」「小手」が高い因子負荷量を示した。これは打突部位であるとイメージできるので、第 IV 因子は「打突部位」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .84$ であった。第 V 因子は、「良い」「姿勢」が高い因子負荷量を示した。これは、姿勢を良くするとイメージできるので、第 V 因子は「姿勢」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .73$ であった。

(3) 未経験者の因子分析

Table 3 は、TeST における経験者の因子分析の結果である。因子分析の結果、5 因子までを抽出した。

第 I 因子は、「日本」「伝統」「文化」が高い因子負荷量を示した。これは、日本の伝統文化である道とイメージできるので、第 I 因子は「武道」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .64$ であった。第 II 因子は、「声」「出す」が高い因子負荷量を示した。これは、大きい声を出すイメージできるので、第 II 因子は「気合」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .93$ であった。第 III 因子は、「精神」「統一」「鍛える」が高い因子負荷量を示した。これは、精神を統一して鍛えるとイメージできるので、第 III 因子は「精神」と命名した。Cron-

Table 4 因子の命名 (TeST)

	全員	経験者	未経験者
第 I 因子	打突部位	有効打突	武道
第 II 因子	有効打突	気合	気合
第 III 因子	気持ち	武道	精神
第 IV 因子	気合	打突部位	気持ち
第 V 因子	武道	姿勢	剣道具

bach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .58$ であった。第 IV 因子は「相手」「思いやる」「気持ち」が高い因子負荷量を示した。これは相手の気持ちを思うイメージできるので、第 IV 因子は「気持ち」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .52$ であった。第 V 因子は、「重い」「服」「着る」が高い因子負荷量を示した。これは、防具を身につけた重たいイメージができるので、第 V 因子は「剣道具」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .47$ であった。

Table 4 は全員、経験者、未経験者の因子分析の結果、各因子の命名をまとめたものである。経験者と未経験者に共通する因子は「武道」「気合」であった。

2. 因子分析（最も強いイメージ）

(1) 全回答の因子分析

Table 5 は、最も強いイメージにおける全回答の

Table 5 因子分析の結果 (全回答)

因子名	因子					共通性	
	I	II	III	IV	V		
武道	日本	0.79	-0.01	-0.02	-0.07	-0.15	0.65
	伝統	0.76	-0.01	-0.02	-0.06	-0.14	0.60
	文化	0.63	-0.01	-0.02	-0.08	-0.12	0.42
	古来	0.56	-0.01	-0.02	-0.06	-0.13	0.33
	運動	0.48	-0.01	-0.01	-0.06	-0.10	0.25
	スポーツ	0.43	-0.02	-0.02	0.04	-0.08	0.19
有効打突	気	-0.05	0.96	-0.01	-0.05	-0.07	0.93
	剣	-0.05	0.96	-0.01	-0.05	-0.07	0.93
	重要	-0.03	0.79	-0.01	-0.04	-0.06	0.63
日常生活	日常	-0.02	-0.01	0.92	-0.05	0.01	0.85
	生活	-0.02	-0.01	0.89	-0.04	0.02	0.79
	使える	-0.01	-0.01	0.70	-0.04	0.02	0.49
気持ち	相手	-0.05	-0.02	-0.02	0.84	-0.04	0.71
	思いやる	-0.03	-0.01	0.00	0.49	-0.04	0.24
動作	動き	0.03	0.01	-0.08	-0.14	0.66	0.46
	足	0.03	0.00	-0.06	-0.15	0.53	0.30
	決まる	0.02	0.00	-0.05	-0.07	0.48	0.24
	出来る	0.02	0.00	-0.06	0.01	0.47	0.23
因子寄与	2.75	2.56	2.19	2.09	2.00	11.59	
因子寄与率 (%)	15.3	14.2	12.2	11.6	11.1	64.4	
累積因子寄与率 (%)	15.3	29.5	41.6	53.2	64.4		

因子分析の結果である。因子分析の結果, 5 因子までを抽出した。

第 I 因子は, 「日本」「伝統」「文化」「古来」「運動」「スポーツ」が高い因子負荷量を示した。これは, 日本の伝統文化である道とイメージできるので, 第 I 因子は「武道」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は, $\alpha = .74$ であった。第 II 因子は, 「気」「剣」「重要」が高い因子負荷量を示した。これは, 有効打突の気剣体が重要であるとイメージできるので, 第 II 因子は「有効打突」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は, $\alpha = .90$ であった。第 III 因子は「日常」「生活」「使える」が高い因子負荷量を示した。これは日常生活で使えるとイメージできるので, 第 III 因子は「日常生活」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は, $\alpha = .80$ であった。第 IV 因子は, 「相手」「思いやる」が高い因子負荷量を示した。これは相手を思いやるとイメージできるので, 第 IV 因子は「気持ち」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は, $\alpha = .61$ であった。第 V 因子は, 「動き」「足」「決まる」「出来る」が高い因子負荷量を示した。これは剣道での動作とイ

メージできるので, 第 V 因子は「動作」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は, $\alpha = .56$ であった。

(2) 経験者の因子分析

Table 6 は最も強いイメージにおける経験者の因子分析の結果である。因子分析の結果, 5 因子までを抽出した。

第 I 因子は, 「日本」「伝統」「文化」「古来」「運動」「スポーツ」が高い因子負荷量を示した。これは, 日本の伝統文化である道とイメージできるので, 第 I 因子は「武道」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は, $\alpha = .74$ であった。第 II 因子は, 「気」「剣」「重要」が高い因子負荷量を示した。これは, 有効打突の気剣体が重要であるとイメージできるので, 第 II 因子は「有効打突」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は, $\alpha = .90$ であった。第 III 因子は, 「相手」「思いやる」が高い因子負荷量を示した。これは相手を思いやることとイメージできるので, 第 III 因子は「気持ち」と命名した。Cronbach の α 係数による信頼性係数は, $\alpha = .63$ であった。第 IV 因子は, 「姿勢」「良い」が高い因子負荷量を示し

Table 6 因子分析の結果（経験者）

因子名	因子					共通性	
	I	II	III	IV	V		
武道	日本	0.80	-0.01	-0.06	-0.02	-0.10	0.66
	伝統	0.80	-0.01	-0.06	-0.02	-0.11	0.66
	文化	0.64	0.00	-0.07	-0.01	-0.10	0.42
	古来	0.61	0.00	-0.05	-0.01	-0.11	0.39
	運動	0.54	0.00	-0.06	-0.01	-0.09	0.31
	スポーツ	0.44	-0.02	0.04	-0.02	-0.04	0.20
有効打突	気	-0.06	0.96	-0.06	-0.01	-0.09	0.93
	剣	-0.06	0.96	-0.06	-0.01	-0.09	0.93
	重要	-0.04	0.79	-0.06	-0.01	-0.07	0.63
気持ち	相手	-0.05	-0.02	0.82	-0.01	-0.04	0.69
	思いやる	-0.03	-0.01	0.41	0.00	-0.02	0.17
姿勢	姿勢	-0.02	-0.01	-0.07	0.99	0.01	0.99
	良い	-0.02	-0.01	-0.07	0.99	0.01	0.99
日常生活	生活	-0.01	-0.01	-0.30	-0.10	0.60	0.45
	日常	-0.01	-0.01	-0.30	-0.10	0.59	0.44
因子寄与	2.85	2.57	2.09	2.02	1.98	11.52	
因子寄与率 (%)	19.0	17.1	13.9	13.5	13.2	76.8	
累積因子寄与率 (%)	19.0	36.1	50.1	63.6	76.8		

た。これは良い姿勢とイメージできるので、第IV因子は「姿勢」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = 1.00$ であった。第V因子は、「生活」「日常」が高い因子負荷量を示した。これは日常生活とイメージできるので、第V因子は「日常生活」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .90$ であった。

(3) 未経験者の因子分析

Table 7は、最も強いイメージにおける未経験者の因子分析の結果である。因子分析の結果、5因子までを抽出した。第I因子は、「日本」「文化」が高い因子負荷量を示した。これは、日本の文化であるとイメージできるので、第I因子は「文化」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .83$ であった。第II因子は、「礼儀」「正しい」が高い因子負荷量を示した。これは、礼儀正しいとイメージできるので、第II因子は「礼儀」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .72$ であった。第III因子は、「伝統」「スポーツ」が高い因子負荷量を示した。これは伝統あるスポーツとイメージできるので、第III因子は「武道」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .50$ であった。第IV因子は、「集中」「必要」が高い因子負荷量を示し

た。これは集中が必要とイメージできるので、第IV因子は「集中力」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .57$ であった。第V因子は、「大切」「相手」が高い因子負荷量を示した。これは相手を大切にとイメージできるので、第V因子は「気持ち」と命名した。Cronbachの α 係数による信頼性係数は、 $\alpha = .46$ であった。

Table 8は経験者、未経験者の因子分析の結果、各因子の命名をまとめたものである。経験者と未経験者に共通する因子は「武道」と「気持ち」であった。

3. t検定による分析 (TeST)

Table 9は、TeST全回答を因子分析した結果と各群に分けて、TeST全回答の因子分析の結果に含まれている因子の語の頻度についてまとめたものである。

(1) 経験者と未経験者の比較

TeSTの全回答を因子分析した結果と経験者の因子分析の結果を比較したところ、経験者の因子分析の結果には、「気」「剣」「重要」「声」「出す」「日本」「文化」「伝統」「面」「小手」の10語が共通していた。そこで、調査対象者ごとに出現頻度を求め、その値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。次に、TeSTの全回答について、因子分析した結果と未

Table 7 因子分析の結果 (未経験者)

因子名		因子					共通性
		I	II	III	IV	V	
文化	日本	0.92	0.10	0.23	-0.03	-0.04	0.92
	文化	0.89	0.04	-0.13	-0.01	-0.02	0.81
礼儀	礼儀	-0.23	0.78	-0.30	-0.22	0.00	0.80
	正しい	-0.17	0.68	-0.23	-0.24	-0.34	0.72
武道	伝統	0.25	0.12	0.82	-0.04	-0.04	0.75
	スポーツ	-0.16	0.06	0.78	-0.03	-0.03	0.64
集中力	集中	-0.02	0.06	-0.02	0.82	-0.03	0.68
	必要	-0.03	0.12	-0.04	0.82	-0.04	0.69
気持ち	大切	-0.04	0.17	-0.05	-0.05	0.79	0.67
	相手	-0.01	0.07	-0.01	-0.02	0.77	0.59
因子寄与		1.82	1.60	1.50	1.47	1.35	7.75
因子寄与率 (%)		18.2	16.0	15.0	14.7	13.5	77.5
累積因子寄与率 (%)		18.2	34.2	49.3	64.0	77.5	

Table 8 因子の命名 (最も強いイメージ)

	全員	経験者	未経験者
第 I 因子	武道	武道	文化
第 II 因子	有効打突	有効打突	礼儀
第 III 因子	日常生活	気持ち	武道
第 IV 因子	気持ち	姿勢	集中力
第 V 因子	動作	日常生活	気持ち

Table 9 全回答の因子分析と共通する因子の頻度 (TeST)

		N	平均	標準偏差
全員	経験者	2037	0.18	0.531
	未経験者	943	0.15	0.479
経験者	男子	803	0.13	0.339
	女子	1234	0.20	0.534
未経験者	男子	358	0.08	0.358
	女子	585	0.14	0.473

経験者の因子分析の結果を比較したところ、未経験者の因子分析の結果には、「日本」「伝統」「文化」「声」「出す」「相手」「気持ち」の7語が共通していた。そこで、調査対象者ごとに出現頻度を求め、その値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。さらに、経験者の頻度の平均値(0.18)と未経験者の頻度の平均値(0.15)を対応のない t 検定を用いて分析したところ、有意な差は認められなかった($t(2017)=1.44, p>.05, d=.14$)。

(2) 経験者の男子と女子の比較

TeSTの全回答について、因子分析した結果と経験者男子の因子分析の結果を比較したところ、経験者男子の因子分析の結果には、「相手」「声」「剣」の3語が共通していた。そこで、調査対象者ごとに出現頻度を求めその値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。次に、TeSTの全回答を因子分析した結果と経験者女子の因子分析の結果を比較したところ、経験者女子の因子分析の結果には、「小手」「胴」「面」「気」「剣」「重要」「声」「出す」「相手」の9語が共通していた。そこで、調査協力者ごとに出現頻度を求め、その値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。

さらに、経験者男子の頻度の平均値(0.13)と経験者女子の頻度の平均値(0.20)を対応のない t 検定を用いて分析したところ、女子の平均値が男子よりも有意に高いことが認められた($t(2033.7)=3.27, p<.01, d=.07$)。

(3) 未経験者の男子と女子の比較

TeSTの全回答について、因子分析した結果と未経験者男子の因子分析の結果を比較したところ、未経験者男子の因子分析の結果には、「面」「出す」「声」の3語が共通していた。そこで、調査対象者ごとに出現頻度を求めその値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。次に、TeSTの全回答を因子分析した結果と未経験者女子の因子分析の結果を比較したところ、未経験者女子の因子分析の結果

果には、「日本」「伝統」「文化」「声」「出す」「気持ち」の6語が共通していた。そこで、調査協力者ごとに出現頻度を求めその値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。

さらに、未経験者男子の頻度の平均値(0.08)と未経験者女子の頻度の平均値(0.14)を対応のない t 検定を用いて分析したところ、未経験者の女子の平均値が未経験者の男子の平均値よりも有意に高いことが認められた($t(899.14)=2.28, p<.05, d=.02$)。

(4) 男子の経験者と未経験者の比較

経験者の頻度の平均値(0.13)と未経験者の頻度の平均値(0.08)を対応のない t 検定を用いて分析したところ、経験者の平均値が未経験者よりも有意に高いことが認められた($t(1159)=2.45, p<.05, d=.16$)。

(5) 女子の経験者と未経験者の比較

経験者の頻度の平均値(0.20)と未経験者の頻度の平均値(0.14)を対応のない t 検定を用いて分析したところ、経験者の平均値が未経験者よりも有意に高いことが認められた($t(1282.6)=2.23, p<.05, d=.12$)。

4. t 検定による分析 (最も強いイメージ)

Table 10は、最も強いイメージ全回答を因子分析した結果と各群に分けて、最も強いイメージ全回答の因子分析の結果に含まれている因子の語の頻度についてまとめたものである。

(1) 経験者と未経験者の比較

最も強いイメージの全回答について、因子分析した結果と経験者の因子分析の結果を比較したところ、経験者の因子分析の結果には、「日本」「伝統」「文化」「古来」「運動」「スポーツ」「気」「剣」「重要」「相手」「思いやる」「生活」「日常」の13語が共通していた。そこで、調査協力者ごとに出現頻度を求め、その値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。次に、最も強いイメージの全回答を因子分析した結果と未経験者の因子分析の結果を比較したところ、未経験者の因子分析の結果には、「日本」「文化」「伝統」「スポーツ」「相手」の5語が共通していた。そこで、調査協力者ごとに出現頻度を求めその値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。

さらに、経験者の頻度の平均値(0.38)と未経験者の頻度の平均値(0.14)を対応のない t 検定を用いて分析したところ、経験者の平均値が未経験者よりも有意に高いことが認められた($t(314.04)=3.35, p$

Table 10 全回答の因子分析と共通する因子の頻度 (最も強いイメージ)

		N	平均	標準偏差
全員	経験者	240	0.38	0.845
	未経験者	101	0.14	0.470
経験者	男子	106	0.37	0.854
	女子	134	0.33	0.723
未経験者	男子	49	0.04	0.200
	女子	52	0.17	0.550

$<.001, d=.32$)。

(2) 経験者の男子と女子の比較

最も強いイメージの全回答について、因子分析した結果と経験者男子の因子分析の結果を比較したところ、経験者男子の因子分析の結果には、「日本」「伝統」「古来」「文化」「スポーツ」「相手」「思いやる」「出来る」「決まる」の9語が共通していた。そこで、調査協力者ごとに出現頻度を求め、その値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。次に、最も強いイメージの全回答を因子分析した結果と経験者女子の因子分析の結果を比較したところ、経験者女子の因子分析の結果には、「気」「剣」「重要」「伝統」「日本」「文化」「運動」「相手」「生活」「日常」の10語が共通していた。そこで、調査協力者ごとに出現頻度を求めその値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。

さらに、経験者男子の頻度の平均値(0.37)と経験者女子の頻度の平均値(0.33)を対応のない t 検定を用いて分析したところ、有意な差は認められなかった($t(238)=0.39, p>.05, d=.55$)。

(3) 未経験者の男子と女子の比較

最も強いイメージの全回答について、因子分析した結果と未経験者男子の因子分析の結果を比較したところ、未経験者男子の因子分析の結果には、「伝統」の1語が共通していた。そこで、調査協力者ごとに出現頻度を求め、その値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。次に、最も強いイメージの全回答について、因子分析した結果と未経験者女子の因子分析の結果を比較したところ、未経験者女子の因子分析の結果には、「日本」「文化」「伝統」「スポーツ」の4語が共通していた。そこで、調査協力者ごとに出現頻度を求めその値を全回答と共通した語の数で割った平均値を算出した。

さらに、未経験者男子の頻度の平均値 (0.04) と未経験者女子の頻度の平均値 (0.17) を対応のない t 検定を用いて分析したところ、有意な差は認められなかった ($t(64.93) = 1.62, p > .05, d = .32$)。

(4) 男子の経験者と未経験者の比較

経験者の頻度の平均値 (0.37) と未経験者の頻度の平均値 (0.04) を対応のない t 検定を用いて分析したところ、経験者の平均値が未経験者よりも有意に高いことが認められた ($t(127.43) = 3.763, p < .001, d = .46$)。

(5) 女子の経験者と未経験者の比較

経験者の頻度の平均値 (0.33) と未経験者の頻度の平均値 (0.17) を対応のない t 検定を用いて分析したところ、有意な差は認められなかった ($t(121.37) = 1.57, p > .05, d = .23$)。

考 察

本研究は、2012 (平成 24) 年 4 月より中学校保健体育で武道が必修化されたことを受け、実際に武道 (ここでは剣道) を授業で履修している中学生を対象に、履修することによる剣道イメージに特徴が見られるのか、また剣道をまったく経験していない中学生との間に剣道イメージの違いが見られるのかを明らかにしようとしたものである。

1998 (平成 10) 年の文部科学省「学習指導要領」の保健体育科目では、A 体づくり運動、B 器械運動、C 陸上競技、D 水泳、E 球技、F 武道、G ダンス、H 体育に関する知識の領域から、1 年生では武道 (柔道、剣道、相撲から 1 つ) またはダンスのいずれかを選択必修 (それ以外の領域は必修)、2 年生と 3 年生では、AH が必修、BCD が 1 または 2 領域選択必修、EFG の中から 2 領域を選択履修することであった。2008 (平成 20) 年の学習指導要領の改訂は、中学生にとって武道を学び体験する大きな機会になったはずである。しかし、これまで武道は、体育の授業では選択領域として位置づけられ、実際は各中学校の裁量に委ねられていたので必修化は学校現場にさまざまな混乱をもたらした (北村, 2013)。すなわち、各中学校が武道種目に何を選択するのか、指導者はどのような経歴の者が適切なのか、授業を実施する場所や教授法をどのように保証するのか、安全に授業を受けるための道着や防具、教材をいかに揃えるのかなど、整備しなければならない問題点は多い。さら

には武道の授業を通して期待される学習効果を把握することは、必修化になった最大の要因と思われる。特に剣道の授業では、防具や竹刀の費用、着脱の時間確保、けがの発生を防ぐことなども課題である。江原 (2017) は、剣道の問題点として、授業の方法や場所、指導者や指導法、けがの頻度、熱中症の予防、武道場の環境整備などについて考察し、中学生にとって、より興味が持てる授業内容の充実を求めている。

他方、剣道の実技を体験させること、技能を習得させることのほかに、剣道に限らずそれぞれの武道種目の歴史や伝統、文化を学ぶことは、武道必修化の大きな観点ではないかと思われる。それは、2006 (平成 16) 年の改正「教育基本法」にも記されているように、わが国独自の伝統と文化の尊重にほかならない。和田 (2015) も、武道を武道として伝統、文化に位置づけることで、それが学校剣道の教育的な使命であると述べている。本研究の調査内容は、中学生が率直にイメージしている剣道への認識であり、剣道経験者と未経験者との間に剣道に対する認識の違いがあるとすれば、その心理的な構造の違いを明瞭に描くことができるはずである。

中学生の TeST 回答結果を因子分析したところ、「武道」を構成している「日本」「伝統」「文化」という因子は、剣道経験者では第 III 因子、未経験者では第 I 因子に認められた。剣道経験者の第 I 因子は「有効打突」や「打突部位」であり、これは「一本を決める (試合に勝つ)」ことを意味するイメージであった。これまでに剣道の経験がなかった者は、「有効打突」や「打突部位」という剣道用語の知識がないため、剣道について純粋に「武道」であるイメージしたものと思われる。このことから、剣道経験者は実際に剣道を経験しているため、「武道」というイメージよりも「一本を決める」というイメージを優先して回答したものと考えられる。さらに、「剣道具」という因子が未経験者にもみ見出された。経験者にとって剣道具はさほど重くなく、取り立てて意識するものではないが、未経験者にとっては身に付ける剣道具が重そうに感じられるのであろう。

最も強いイメージの回答を因子分析すると、剣道経験者は「武道」、未経験者は「文化」が第 I 因子であった。TeST に書かれた剣道イメージの中で、武道を強く認識するのは、おそらく中学生であっても「剣道は日本古来の伝統文化である」という知識を全面

に表現したのではないかと考えられる。剣道を経験する者は、剣道を習う前に「剣道」についての基礎知識を講義される。併せて「剣道と武道」との関係を学ぶことで、武道に強いイメージが反映されたものと推測できる。しかし、剣道未経験者は剣道の詳しい知識を持っていないので、「文化」という因子が第1因子になった。武道必修化による授業は、剣道に限らず柔道や相撲などにも及ぶことから、必修化全体としての「武道」教育という枠組みの中で、「日本」「伝統」「文化」に繋がる知識を獲得し、イメージを膨らませたものと解釈できる。これは、武道必修化が目的とした教育内容に合致しているものである。また、アニメーションやテレビドラマなどを視聴する機会が影響していたとも考えられる。

次に、因子の出現頻度を算出したところ、剣道経験者と未経験者の有意な差は認められなかった。しかし、最も強いイメージにおいて、経験者の数値が未経験者よりも有意に多かった。これは、剣道経験者の方が未経験者よりも剣道イメージとして想起される単語がまとまっていたものと考えられるが、おそらく剣道授業などの中で指導される機会の多さが影響したものであろう。

TeSTの回答について、剣道経験者、未経験者ともに女子の頻度が男子よりも有意に多かった。さらに、男子と女子それぞれの経験者と未経験者を比較したところ、どちらも経験者の方が有意に多かった。これは、剣道の授業などを通して教師からの指導による影響が大きいと思われる。なお、剣道経験者、未経験者ともに女子の方が男子よりも因子の頻度が多かった。この結果が語彙力の差に起因するの否かは、今後の研究に待ちたい。

最も強いイメージにおいて、剣道未経験者に「礼儀」の因子が認められたが、経験者にはそれがなかった。野瀬・大保木・野瀬(2002)は、「礼儀作法などを形式的に学習するのみではなく、相手を尊重する方法として礼を行ない、その中で、自分自身を律する『克己』の心を養うことと、わが国の固有の文化として、武道を学習するには、指導書に示されている技能習得を通して人間としての望ましい自己の形成を重視するという武道の伝統的な考え方の実践と体験を欠かしてはならない」と報告している。すなわち、剣道未経験者は、剣道の立ち居振る舞いに強く「礼儀」の態度を感じる一方、経験者には周知のことである

ため、改めてイメージしていないのかもしれない。

本研究の結果から、武道必修化に伴い、剣道未経験者に「剣道」を教えるときには、剣道の技法を指導することはもちろんであるが、「武道」の基本理念を併せながら授業を組み立てていくことが望ましいと考えられる。

引用文献

- 秋田裕太・矢野宏光 2018 初学者が持つ剣道授業のイメージに関する因子分析的検討 日本心理学会第82回大会発表論文集, 82, 932.
- 秋田裕太・矢野宏光 2020 女子中学生が剣道授業に対して抱くイメージの変容: 剣道未経験者を対象に剣道用具を着けず木刀だけをを用いて実施した場合 武道学研究, 52(2), 133-141.
- 安道太軌・濱田初幸・川西正志・北村尚浩 2012 中学生の武道に対するイメージ 日本体育学会大会予稿集, 63, 102.
- 江原孝史 2017 中学校武道必修化の問題と課題, 特に剣道に焦点をあてて 教育総合研究, 1, 209-221.
- 船越正康 1979 現代武道観研究 — 武道に関する表現語彙の取集 — 武道学研究, 11(3), 49-55.
- 鼻岡美里・栗田昇平・柿山哲治 2017 中学校武道領域における弓道授業の教育効果: F県K市立K中学校を対象とした意識調査 武道学研究, 49(3), 201-212.
- 樋口耕一 2020 社会調査のための計量テキスト分析 — 内容分析の継承と発展を目指して — 第2版, ナカニシヤ出版 pp.2020.
- 星野 命 1986 20 答法 パッケージ性格の心理 6. 性格の理解と把握 プレーン出版 pp.169-185.
- 星野 命 2000 我が国における20 答法 (Twenty Statements Test=TST./Who am I?法)の普及と効果 日本性格心理学会第8回大会発表論文集 pp.32-33.
- 飯田頼男・菅波盛男・田中秀幸・吉岡 剛・遠藤純男・青柳 領・武内政幸 1984 柔道選手に対するimageの因子分析的研究 武道学研究, 16(2), 8-17.
- 糸岡夕里・日野克博・中岡祐紀・佐伯沙織・池内裕紀 2011 中学校における「剣道」の授業実践—生徒の剣道に対するイメージに着目して— 愛媛大学教育学部紀要, 56, 137-144.
- 泉 賢司・中島たけし・野木将典・小森富士登 2002 大学空手道に対するイメージの因子分析的研究 — 空手道部員群と非空手道部員群との比較 — 國士舘大學武徳紀要, 18, 29-51.
- 加賀 勝 1993 武道に対するイメージに関する研究 岡山大学教育学部研究集録, 94(1), 19-24.
- 軽米満世 2020 千葉県教育庁体育科調査 (未刊行).
- 木原資裕・今井三郎 1985 剣道に対するイメージについて 武道学研究, 17(1), 4-5.

- 木村清人 2011 学校武道の歴史 月刊「武道」 9, pp. 40-45.
- 北村尚浩 2013 武道必修化の課題と展望 スポーツ社会学研究, **21**(1), 23-35.
- 小林優希・平岡拓晃・桐生習作・鍋山隆弘・麓 正樹・石川美久 2018 大学体育における武道種目受講学生の武道イメージ 武道学研究, **50**(2), 79-87.
- 小俣幸嗣・中村良三・藤堂良明・佐藤伸一郎・高橋幸治・青柳 領 1993 正課体育柔道受講生の柔道に対するイメージの研究 大学体育研究, **15**, 11-22.
- 小森富士登・飯田頼男・竹内政幸・中島たけし 1993 本学学生の剣道に対するイメージの因子分析的研究 — 男子運動部員と非運動部員との比較 — 國士館大學武徳紀要, **9**, 61-83.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**(1), 68-76.
- Kuhn, M. H. 1960 Self-Attitude by Age, Sex, and Professional Training. *Sociological Quarterly*, **1**, 39-55.
- 熊澤美裕紀 2014 中学生の合気道に対するイメージの研究 武道学研究, **46**(3), 111-118.
- 三藤芳生 2015 特別レポート「中学校武道必修化第3回アンケート調査結果について」 月刊「武道」, **12**, 138-143.
- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 保健体育(編) 2017 文部科学省 東山書房.
- Moriwaki, Y., Nakajima, T., Iida, E., Higo, R., & Fujita, S. 2008 Comparative Research into Images of Judo Maintained by Japanese and Koreans — An Investigation of College Judo Club Member' Attitudes —. *Japanese Journal of Applied Psychology*, **33**(2), 146-147.
- 中島たけし・森脇保彦・飯田頼男・藤田主一・山本洋祐・田辺 勝 2006 柔道の応用心理学的研究 — 柔道に対するイメージ調査の検討(その3) — 國士館大學武徳紀要, **22**, 1-28.
- 中島たけし・橋本 昇・火箱保之・岡田龍司・長尾淳彦 2010 柔道の応用心理学的研究(柔道に対するイメージ調査の検討⑧) — 日本マスターズ柔道選手群と日本一流大学生柔道部員群 — 國士館大學武徳紀要, **26**, 1-25.
- 野瀬清喜・大保木輝雄・野瀬英豪 2002 武道の伝統的な行動のしかたについて 埼玉大学紀要教育学部(教育科学II), **51**(1), 89-96.
- 和田宗春 2015 中学校武道必修化にともなう剣道授業の課題についての一考察 文京学院大学人間学部研究紀要, **16**, 177-193.
- 吉井美恵子 2020 なぎなたの現状と課題 月刊「武道」, **11**, 58-65.
- 由留木俊之・金森昭憲・太田順康・石川美久 2018 武道授業体験を通じた武道のイメージ形成について 武道学研究, **51**(Supplement), 51.

(受稿: 2020.11.20; 受理: 2021.1.21)